

お茶大図書館発のイノベーション

－「お茶の水女子大学 E-book サービス」に見る大学図書館の未来－

餌取直子, 森 いくみ

抄録：お茶の水女子大学が2012年3月に開始した出版事業である「お茶の水女子大学 E-book サービス」は、開始から2年で4作品を世に送り出し、現在も2作品を準備中である。本稿では、サービスが誕生した経緯、運営体制や必要経費、出版のプロセスなどの実際、出版した作品の詳細や著者・読者の声、利用状況などを具体的に紹介する。また、サービスに対する評価、大学図書館が出版事業に携わる意義、そのために必要となるスキルや意識改革について担当者の体験を述べると共に、組織としての体制整備や今後の大学図書館の在り方について示唆する。

キーワード：大学図書館、電子書籍、出版、機関リポジトリ、教育・研究成果公開

はじめに

「お茶の水女子大学 E-book サービス」¹⁾ (以下、E-book サービス) は、お茶の水女子大学 (以下、本学) が2012年3月に開始した出版事業で、本学の教職員・学生による教育・研究成果の出版を支援する目的で構築された (図1)。

の顔として E-book サービスの専用サイトから公開している。また、希望があればオン・デマンド印刷による冊子の有償販売を行っている。

何故、「出版」という形を目指したのか。そして何故、図書館が大学の出版事業を担うことになったのか。本稿は、本学が、図書館による「出版」事業を実現した E-book サービスについて詳細を報告し、今後の図書館の可能性について示唆するものである。

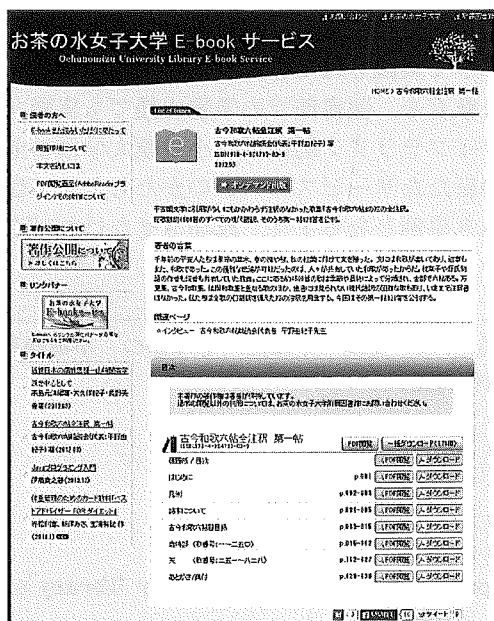


図1 E-book サービスの画面

本学の教育・研究成果をインターネットで電子的に公開するしくみとしては、機関リポジトリの「TeaPot」²⁾ が2007年4月から運用されている。E-book サービスは、TeaPotの既存のシステムを活用しているため低コストで開発運用ができ、なおかつ後述するとおり学内外の関連組織が協働して運用に当たるエコシステムとしてデザインされた。データ (書誌情報と本文) は TeaPot に搭載し、電子書籍

1. E-book サービスとは何か

1.1 機関リポジトリとの違い

機関リポジトリ (Institutional Repository 以下、IR) とは、教育・研究成果を大学が責任を持って収集・蓄積し、オープンアクセス化することを目的とするシステムである。本学の IR である TeaPot は、2007年以降、特に本学に関連の深い学術雑誌や紀要の電子ジャーナル化を進めてきた。また、2013年4月の学位規則改正による博士学位論文のインターネット公表制度化を受け、本学の博士学位論文を公表するためのプラットフォームとしても機能している。IRの役割は、このように、従来流通経路が限られていた成果を広く公開する機能とともに、高額な購読費を払わなければ読むことができない商業学術出版社への対抗策として、学術雑誌論文をオープンアクセス化するという機能も担っている。いずれにしても、取り扱うコンテンツは、多くの場合、既に公刊され、価値の確定されたものであることに共通点がある。

これに対して E-book サービスは、未公刊で価値が未確定のコンテンツを取り扱い、大学が責任を持って、初めて世に出す (すなわち、出版する) という違いがある。

1.2 E-book サービス誕生の経緯と意義

E-book サービスは、近藤譲附属図書館長（2009年当時）の発案で「(大学の中には)世の中に出したいと思っているけれど引き受ける出版社とめぐり会えずに埋もれている原稿があるはずだ。」という考えから始まった。

こうした要望への実現策としては、大学出版部の発足という形で実を結ぶというのが従来の在り方だと思われる。(社)大学出版部協会は、大学出版部の任務について以下のように述べている³⁾。

「大学の基本的機能は研究と教育であり、また最近では大学と一般社会との交流が大学の果たすべき一つの重要な役割と考えられていますが、大学出版部は出版という仕事を通じてこのような大学の機能に参加するものであります。すなわち、研究成果の発表としての学術書の刊行、効果的な教育を授けるすぐれた教科書の刊行、および大学における研究成果の社会への普及をはかる啓蒙書・教養書の刊行、これらが大学出版部に課せられた基本的な任務であるといえましょう。」

本学の場合は、こうした理念を共有しつつ、より簡便に、「無償で・電子的な形で」教育・研究成果を世に出すことを志向した。大学を取り巻く社会的環境として、誰もがコストをかけずに電子的なコンテンツを流通させることができる時代に即応した、イノベーションであったと言える。

図書館がその中心的役割を担うことになったのは、発案が附属図書館長だったことに加え、E-bookの公開プラットフォーム(入れ物)となりえるTeaPotを既に運営していたことが大きい。また、実際に、研究成果を「無償で・電子的な形で」公開してもよいと考える研究者の方々の存在も大きかった。E-bookサービスで著作を出版した平野由紀子本学名誉教授は、インタビュー⁴⁾でE-bookサービスの意義について以下のように述べられている。

「E-bookやオン・デマンドという形で出版することに意義があると思います。ただ、どれも無償ですよ。無料で公開しているというところが驚く人があるわけです。このE-bookサービス事業には電子ジャーナルの高騰化、学術情報の寡占化といった流れに対して、私たちは小さいけれども抵抗しているという目的もあったわけですよ。」

私たちは原稿料が入らなくても読んでもらえばいい、研究の成果を共有することに意義がある

と思っているので、そういう意味ではE-bookは本当に合致していました。

ただし、従来の書籍という形態を決して否定しているわけではありません。書籍という形態がなくなってしまうのは困ると思います。書籍には書籍としてのよさがあるので、やはり大事にしたいという気持ちは一方に強くあります。」

このような研究者たちの情熱を図書館が受け止める形で、E-bookサービスの実現に向けた取組みが動き出した。約3年の準備期間を経て、2012年3月に『近世日本の儒教思想』と『古今和歌六帖全注釈 第一帖』という2作品がE-bookサービスで電子出版された。これらの作品は、後述するようにそれぞれ著者が驚くほどよくダウンロードされ、またオン・デマンド印刷製本の注文が想定以上に來ている。

1.3 E-book サービスの運営体制と必要経費

(1) 運営体制

E-bookサービスの事業を運営するための重要事項を審議する組織として、「お茶の水女子大学E-bookサービス運営委員会」(以下、委員会)を設けている。委員会のメンバーは、附属図書館長・副学長(学術・情報担当)、理事・副学長(国際・研究担当)、特定非営利活動法人お茶の水学術事業会(以下、事業会)理事長及び理事、図書・情報チームリーダーである。お茶の水女子大学としてのブランドを冠して出版することになるので、出版の可否をこの委員会で審議する。

著者は、E-bookサービスによる出版の申請、及び原稿の作成を行う。原稿は、原則としてそのままTeaPotに搭載できるPDFの形で提供していただくこととしている。

著者とのやりとり、ISBNの付与、TeaPotへのデータ搭載、E-bookサービスページの作成等の実務は、図書・情報チーム内に設置されたプロジェクトグループ「TeaPotグループ」が担当する。

基本的には電子出版であるが、冊子を希望される読者のために、オン・デマンドでの印刷販売も行うこととなった。この時、現金の授受ができない図書館に代わって、冊子体購入希望者との対応、印刷製本の発注は事業会が担当することとなった。

このように、E-bookサービスは、運営委員会の下、著者、附属図書館、事業会の3者が協働して事業の運営に当たっている(図2)。

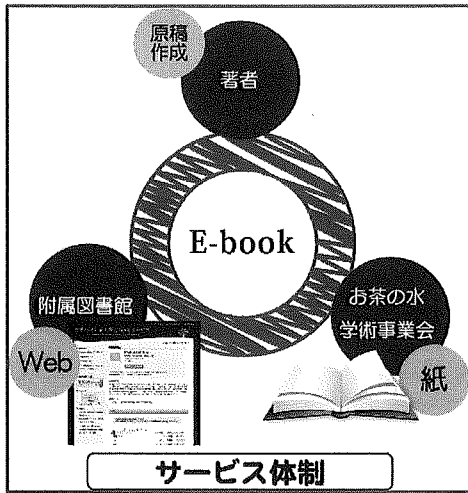


図2 E-book サービスの体制

ちなみに、チーム内プロジェクトグループとは、3月～翌年2月を1タームとし、係を超えたメンバーが自発的に集まって各プロジェクト業務に当たるしくみである。TeaPotのほか、企画展示、情報リテラシー教育支援、館内環境向上等が設置されており、通常の係業務を超えて、課題解決に繋がるさまざまな取組みを実践している。2014年のTeaPotグループメンバーは、チームリーダー、常勤職員2名、非常勤職員2名、派遣職員1名である。

(2) 必要経費

E-book サービスのシステム構築にかかる経費は、既存のTeaPotの仕組みを活用したこと、E-bookサービスの専用サイトはプロジェクトメンバーがデザイン・作成したことから、目に見えるコストはほとんどかからなかった(図3)。

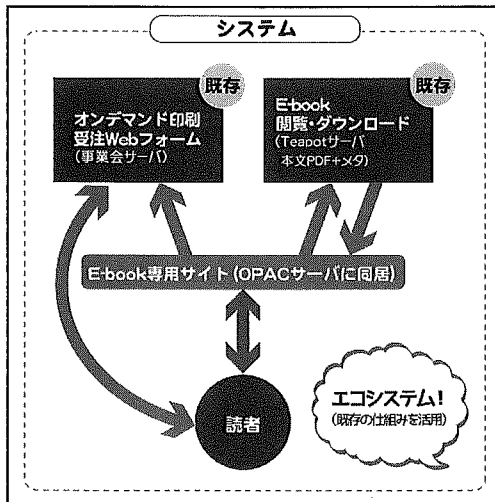


図3 E-book サービスのシステム

運営経費としてTeaPot用サーバのレンタル料が必要であるが、TeaPotは図書館業務システムのレンタル契約に含まれており、容量も充分であることからE-bookサービスとしての新たなコストは生じていない。また、オン・デマンド印刷の受付は、事業会のウェブサイト上にフォームを設置していただいている。その他、ISBN取得経費、後述する原稿の校正料金がある。

ISBNを付与することは、出版にあたって信頼性と流通性を確保するために大変重要である⁵⁾。教員から「ISBNが付与できると聞いたが、これから印刷し、電子的にも公開したいと考えている科研費の報告書にも付けられますか。」などという問い合わせを受けることもあり、紙であれ、電子であれ、本の体裁としてISBNが不可欠な要素と認識されていることが伺える。ISBNは、日本図書コード管理センター⁶⁾が有償で配布しており、本学では、ISBNをまとめて100冊分購入した。料金は当時100冊で3万円弱(1冊当たり約300円)である。費用対効果は極めて高いと言える。

このように、E-bookサービスは、著者、附属図書館、事業会の三者がそれぞれの得意分野を生かし、協働して役割分担をすることで、実務面でも経費面でも大きな負担増なく、出版事業を実現することができたエコシステムと言える。

2. E-book サービスの実際

2.1 E-book 出版対象著作物

出版対象の著作物は、以下のとおりである。

- ① 本学の教職員・学生(卒業生・修了生・卒園生を含む)の研究・教育成果著作物のうち、「単行本(学術専門書)に相当する形態と規模を有するもの」
- ② 教科書、博士論文を単行本形態に編集したもの
- ③ エッセイ、よみものは当面、対象としない。

最初の2作品は学術専門書に相当する形態であった。後述するとおり、3作品目は教科書、4作品目はカード教材と、異なる形態の出版が続いた。E-bookサービスは、本学の多様な研究・教育から生み出されるさまざまなタイプの成果物を公開する場として機能している。

2.2 出版のプロセス

出版のプロセスは以下のとおりである(図4)。

- ① E-bookの出版を希望する著者は、E-bookサービスページからダウンロードした「著作の概要レポート」に必要事項を記載し、委員会へ提出する。記載事項は、著作の概要、目次または構成、ページの概数、希望の版形、執筆状況等である。

- ②委員会が出版の審議を行う。メール審議が多い。
- ③委員会で出版の承認が得られたら、著者は附属図書館、事業会双方と「利用許諾契約」を締結し、公開可能な原稿の作成（使用した図版の転載手続きなどの権利処理を含む。原稿は、原則としてPDFファイルで提出。）を行う。この間、附属図書館では適宜著者へのサポートを行う。例えば、ページレイアウトの相談や、必要に応じて専門業者に校正を依頼するなどしている。
- ④原稿受領後、附属図書館でISBNや奥付、著者略歴等を付して図書としての体裁を整え、PDFファイルをTeaPotに搭載し、E-book専用サイトから公開する。

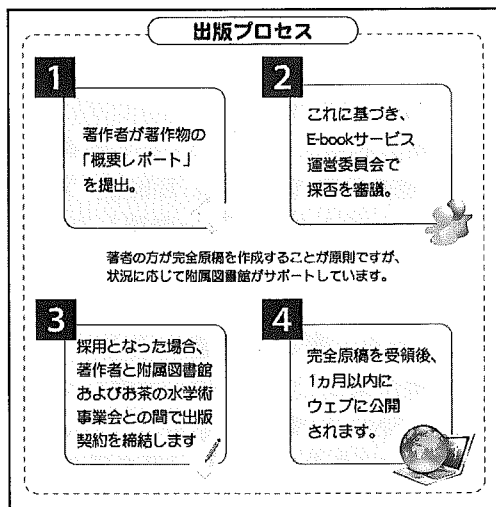


図4 E-bookサービスの出版プロセス

専用サイトを設けたのは、E-bookサービスがTeaPotとは異なる出版サービスであることを明確にするとともに、なるべく読者にとって図書として読みやすく、使い勝手のよいものにするためである。PDFという汎用性のある形式を用いることで、公開作業を省力化し、読者がPCやタブレットなどの任意の環境で利用できるようにした。

E-book専用サイトには、各著作の個別ページを設け、図書の概要や、印刷や閲覧に当たっての注意事項を記載している。また、「オン・デマンド印刷」ボタンから、事業会を通じてクロス製本の有償販売で冊子体を購入できるようになっている。

「著作の概要レポート」の提出からE-bookサービスページで公開するまでの期間は、著作によって異なる。著者のペースで原稿を作成いただいていることが一番大きいですが、図書館側で原稿の体裁を整えて公開するまでの期間も著作によって異なるためである。著者の意向を汲みつつ、読者に見やすいページを提供できるよう、著者が納得するまでページ修

正作業を行う。この作業については、今後ノウハウが蓄積され、ページレイアウトにいくつかのパターンが出来ることで時間短縮が見込まれる。

2.3 従来の出版モデルとの相違

従来の図書出版モデルとの相違点として4点挙げられる。

(1) 著者の権利

E-bookサービス出版にあたり著者が締結する「利用許諾契約」の内容は、「著者が、附属図書館と事業会に著作の利用を許可する」というものである。通常の出版契約のように著者から出版社に出版権を譲渡する契約ではないため、著者が引き続き著作物を自由に使える権限を有する。また、書面を持ってこの契約を解除することができる。つまり、出版後も著者が自由に著作物を利用する権限が保持されているので、後日、著者からの申し出によりE-bookサービスでの公開を取り下げて、別の出版社で販売することも可能である。

このように、E-bookサービスでは、著者の権利を最大限確保し、著者が最も望む形で出版する可能性を残している。

(2) 対価

E-bookサービスでの刊行によって著者が原稿料や著作権使用料を受け取ることはない。しかし、同時に、図書を自費出版する際に必要な制作・印刷・製本代を負担する必要もない。著者が得る最大の対価（メリット）は、大学から出版するという形で「研究成果を本として発信・共有できること」である。

(3) 出版物の在庫

希望者にはその都度オン・デマンド出版で有償販売するため、在庫を持つリスクがない。また、その販売窓口は、出版物販売の経験を持つ事業会が担当するため、附属図書館として新たな業務を行う必要がない。

(4) 流通経路

メインは電子出版E-bookであり、冊子版はオン・デマンドであるため、書店経由での流通はない。コンテンツの発見手段としては、OPACで両方の版が検索できる（図5）ほか、ウェブ検索（図6）やクチコミ、SNS等で発見され、流通している。

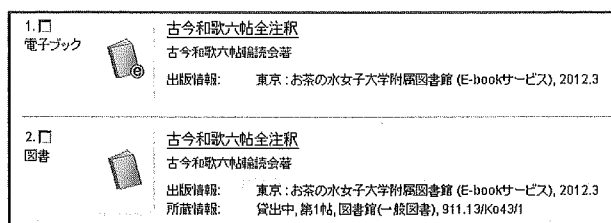


図5 OPAC 検索結果一覧画面

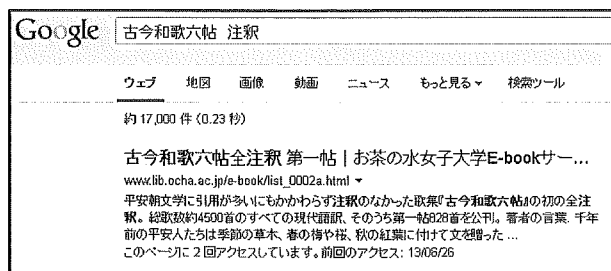


図6 Google 検索結果画面

2.4 出版実績と利用実績

前述のように、2012年3月から現在まで、E-book サービスで4作品を刊行した。すべて異なる分野、内容であり、出版プロセスの詳細も異なったため、その都度状況に応じて出版準備を行ってきた。この章では、各著作の概要を紹介する。(ダウンロード数、オン・デマンド印刷冊数は2014年5月7日現在)

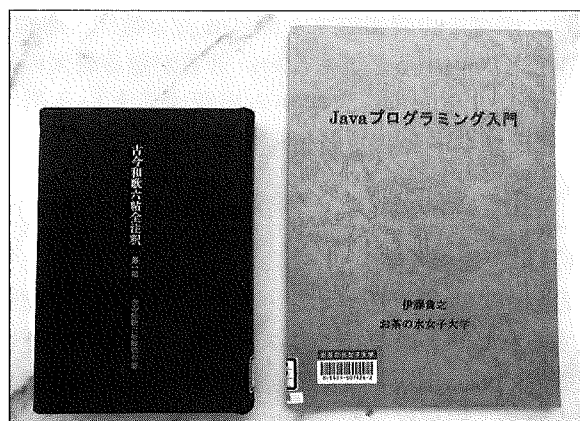


図7 オン・デマンド出版した図書

(1)『古今和歌六帖全注釈 第一帖／古今和歌六帖輪読会 (代表：平野由紀子) 著』(2012年3月28日発行)

これまで注釈のなかった歌集『古今和歌六帖』の初の全注釈に取り組んでいる古今和歌六帖輪読会の第一作目。全6冊を刊行予定である。

写本の翻刻を含むため、Wordでは対応していない文字が多く、原稿は一太郎で作成されていたが、

それでも表現しきれない記号や文字があった。E-book 刊行にあたり、正しい表記で公開するために業者に文字校正を依頼した。

- ・ダウンロード：4,712回
- ・オン・デマンド印刷：18冊

(2)『近世日本の儒教思想—山崎闇斎学派を中心として／高島元洋, 大久保紀子, 長野美香著』(2012年3月28日発行)

近世日本の儒教思想をあらためて考える意図で編集された。研究編と資料編からなる二冊組で、トータルで一千ページを超える。

- ・ダウンロード：8,757回
- ・オン・デマンド印刷：8冊

(3)『Javaプログラミング入門／伊藤貴之著』(2013年10月25日発行)

著者が非常勤講師を担当した大学での講義資料を再構成した理系教科書である。E-book の特長を生かし、ウェブ上でこの教科書を参照しながら、PCで実際にプログラムを打ち込んで実習できるようになっている。自分の手で入力することで学習効果が高まることから、著者の要望により、PDFにコピー不可のセキュリティをかけて公開している。

内容的にSNSと親和性が高く、FacebookやTwitterで話題になり、多くの読者を得たことを受け、E-bookページの個別ページにSNSボタンを設置した。SNSで拡散しやすくなったことで、発見されやすくなっただけでなく、従来のダウンロード数での利用状況把握に加えてSNSで読者の反応を確認できるようになった。また、アクセス経路を分析し、著者に伝えるなどのサービスも行っている。

- ・ダウンロード：8,883回
- ・オン・デマンド印刷：1冊

(4)『体重管理のためのカード教材「ベストアドバイザー FOR ダイエット」／赤松利恵, 新保みさ, 玉浦有紀作』(2014年1月14日発行)

初のカード教材である。図書の形態ではないが、本学の研究成果の一つであることから、E-book サービスで刊行した。読者の利便性を考慮し、印刷方法を詳細に説明する「カード教材の作成手順」の項目を設けたほか、「関連ページ」として、このカード教材を題材として作成された雑誌論文 (TeaPot で全文公開) へのリンクを張った。

- ・ダウンロード：627回
- ・カード教材のため、オン・デマンド印刷はなし。

2.5 著者、読者の声

2013年、第15回図書館総合展／学術情報オープンサミット2013のポスターセッションに参加し、E-bookサービスの取り組みをポスター発表した⁷⁾。ポスター作成に際し、当時刊行準備が佳境に入っていた『Javaプログラミング入門』の著者伊藤貴之教授と、『古今和歌六帖全注釈 第一帖』を利用している学生たちに、E-bookサービスについての感想を尋ねた。また、2012年に実施した平野由紀子本学名誉教授へのインタビュー⁴⁾から、著者、読者の生の声を紹介する。

著者からは、「読者に読まれているようで安心」、「内容的にかなり専門的であるにもかかわらず、多くの人にダウンロードされていることに驚いた」、「出版社によっては締め切りが大変厳しいことがあってたっぷり時間を与えてもらえないことがあるが、E-bookでは自分のペースで執筆に取り組める」、「眠っていた過去の講義資料を再構築したもので、E-bookから出版できて嬉しく思います。大学らしいオープンな形での知の公開の場として、ますますの発展を期待しています」等の感想が寄せられた。

『古今和歌六帖全注釈 第一帖』を利用している学生たちからは、「新しい研究成果は市販の本ではなく論文なことが多く、卒論では文献集めに苦労した。E-bookサービスが比較的新しい研究成果を読める手段になったら魅力的」、「よく使われる注釈書は、痛みが生じているものも多い。E-bookだとボロボロになる心配がなくていいですね。自分が見たい時に見られる、図書館が閉まっている時にも調べられるのがとても嬉しい」、「研究対象が同じ作品に集中すると、注釈書が見られないこともある。参照したいときにいつでも、ウェブで、無料で見られるのがとても嬉しい」との声が寄せられた。

これらの声からも、E-bookサービス実施の意義を確認することができる。

3. E-bookサービスの成果

3.1 事業の成果

E-bookサービスの実施によりもたらされたメリットについて、著者、読者、附属図書館、大学の4者の側面から報告する。

(1) 著者のメリット

大学からの出版という形で、ISBNを付与された図書として、著作を広く公開できる。繰り返しになるが、著者が出版に際して交わす契約は、著者が出版後も引き続き著作物を自由に利用する権限を有

し、著者の書面による申し出によって契約を解除できるなど、将来の商業出版者からの出版の可能性を阻害しない内容となっている。

(2) 読者のメリット

ウェブが利用できる環境であればどこからでも即座に無料で全文を読むことができ、全文検索が行えるなど紙の本にはない閲覧の利便性を享受できる。

(3) 附属図書館のメリット

E-bookサービスを通じ、図書館がこれまで携わることのなかった出版に取り組み、真摯に学問に向き合う著者と連携することで、図書館員は、研究者の研究活動、出版過程、学術情報流通に対する理解を深めた。また、図書館が円滑な出版のためのコーディネートを担った結果、研究者からの図書館と図書館員の役割に対する認識と信頼を深めた。

(4) 大学のメリット

大学の研究・教育成果の発信強化、専用サイトで一元的に公開することによる大学のブランド力の向上というメリットをもたらした。また、研究業績を積み重ねようとする若手の研究者を大学としてサポートできるようになった意義も大きい。

さらに、商業ベースでは困難と考えられる図書の出版が促進され、それがオープンアクセスで公開されることは、情報流通の促進、情報格差の是正、基礎研究の進歩という点で大きな社会的意義を持つ。このような形で大学が社会貢献できるようになったことも大きなメリットである。

3.2 事業の評価

E-bookサービスは、以下の2点を評価され、平成25年度国立大学図書館協会賞⁸⁾を受賞した。

① IRに出版機能を持たせることで、出版会を持たない小規模な大学でも図書出版が可能であることを実証した。IRの有用性を高め、研究者や大学、社会に新たな便宜をもたらした。

② 著者、附属図書館、お茶の水学術事業会という三者が協働して出版する体制を構築することにより、経費や実務の大きな負担増なく出版事業を実現していること、IRを活用した出版公開と、オン・デマンド出版による製本の有償販売の仕組みを構築することで、商業ベースでは困難と考える図書の出版・流通を可能とした。

また、文部科学省の「大学図書館における先進的な取り組みの実践例」⁹⁾にも選定されている。

2013年11月には、図書館総合展でポスター発表

を行うなど、E-book サービスを内外にアピールしており、E-book サービスに興味を持ってくださる図書館や電子出版業界の方も増えているところである。

3.3 事業の新たな展開

E-book サービスの開始から2年あまりが経過し、現在、新たな展開を迎えている。学内認知も高まり、E-book について詳細を知りたいという教員からの問い合わせも複数寄せられるようになった。

この章では、現在刊行準備中の2点のE-book について報告する。

1点目は、前述した『古今和歌六帖全注釈』の第二帖である。既刊の第一帖、準備中の第二帖、また今後刊行が予定されている六帖までを同ページで表示できるよう、ページレイアウトを変更する。

また、著者の希望により、E-book ならではの全文検索機能を生かすため、1冊の図書として刊行するだけではなく、第一帖、第二帖の本文のみを合わせて1つのPDF としても公開することとなった。図書館側からは、本文の小口部分に「古今和歌六帖第二」と表示してはどうかと提案し、採用された。このように、著者の意向を汲みつつ、より「本」として相応しい形で刊行できるよう準備を進めている。2点目は、本学の教育開発センターによる『お茶大 Plone の使い方』で、授業・学習システムの利用方法を説明する教科書である。すでにPDF、e-pub 形式、ibook 形式でデータが作成されており、E-book サービスページでも3つの形式で出版する。著者は純粋に電子ブックとしての出版のみを希望しているため、オン・デマンド出版機能は付けないこととした。著者が所属するセンターのウェブサイトでの公開も可能であるにも関わらず、E-book サービスでの出版を希望する著者が現れたことで、大学名を冠してISBN を付けて出版するE-book が、著者にとって大きな魅力であることが証明されたように思う。

4. 今後の課題と展望

4.1 担当者にとっての課題

筆者（餌取）は、2013年12月よりTeaPot とE-book の主担当となった。短い経験ではあるが、2014年1月のカード教材、『古今和歌六帖全注釈』の第二帖、『お茶大 Plone の使い方』に関する実務を通じて感じた、担当者としての課題を2点挙げる。今後のE-book サービスの発展を目指し、課題解決に励みたい。

(1) 編集・校正知識の必要性

基本的には完成原稿を受け取り、PDF 化してTeaPot に搭載する作業ではあるが、著者へのアドバイスや業者への校正指示には編集・校正の知識が必要となる。研究者として一流である著者に対して信頼に足る的確なサポートを提供するためには、いわゆる図書館業務で培ってきた知識だけでは不十分であることを実感した。

また、これまでは商業出版社からの出版経験のある著者であったため、本文の組み方などは著者の指示通りに対応することが多かったが、今後、出版経験のない若手研究者の著作を出版する可能性を考えると、編集知識はより必要となってくるだろう。

(2) 編集者としての意識改革の必要性

これまでは、教員とは「図書館の利用者」、「情報リテラシー教育を実施する際の教育者」、あるいは「資料購入予算を持つ研究者」という面で関わってきた。E-book サービスでは、図書館員が編集者という立場となって、著者としての教員と新たな関係性を築く必要がある。E-book サービスでは完成原稿の提出を原則としているが、出版事業である以上、著者は図書館側にある程度の編集機能も期待する。また、実際にどのようにE-book として見せるかの画面構成は、プラットフォームを用意している図書館側の仕事となる。その際、著者に寄り添って要望を聞くだけでなく、こちらから積極的に「出版物」としてのよりよい形を提案する姿勢が求められていると感じることがあった。

これまでの業務では、「既存の情報を提供する」ことがメインであった。E-book サービスは、その「既存の情報」を生み出す側に立ち、読者と研究成果を結びつける役割を担う。読者となる利用者が身近にいること、参考になる図書に囲まれている環境であることを強みにして、よりよい本を世に送り出すために、編集者として著者に向き合う姿勢が大事であると感じている。

4.2 整備についての課題

E-book サービスの詳細、及び担当者としての課題を述べてきたが、E-book サービスをさらに発展させ、担当者が十分に力を発揮するためには、体制の整備が不可欠である。いくら担当者にやる気があっても、新しい業務が増えるばかりでは、組織運営は成り立たないのは自明である。

前述したように、本学では従来、E-book サービスに限らず、IR や情報リテラシー教育支援といった新たに生じた業務は、係体制とは別にプロジェク

トグループを結成し、メンバーの自由意志で取り組んできた。このことにより、担当者のやる気を引き出し、小回りの効く柔軟な活動ができていた。

逆に言えば、図書館にとって重要な業務であっても、希望者がいなければ担い手がいないということになってしまう。昨今、大学図書館の学修支援機能や、オープンアクセスへの対応、博士論文のインターネット公表の制度化に代表される教育・研究成果公開支援機能など、従来の資料収集・整理・サービスという伝統的な図書館の枠組みを超えた、直接的な学修・研究支援が大学図書館に強く期待されるようになってきている^{10) 11)}。係とプロジェクトグループの業務の相対的な位置付けや業務量が逆転する事例も見られる中で、無理なく業務を遂行し、あるいは更なる改革に対応できる体制整備が急務であった。このことについては、2014年8月の事務組織改革で対応することを予定している。

さいごに：大学図書館の未来に向けて

出版事業を図書館が担い、図書館員が編集者としての役割を担うことは、本学にとっては従来の図書館機能を超え、全く新しい分野に踏み出すことであった。しかしながら、読者と図書(情報)を結びつけるという図書館の本質を考えれば、大きく逸脱するものではないだろう。著者の「教育・研究成果を世界に発信したい」という希望が全ての出発点である。本学では、E-bookサービスを「教育・研究成果公開支援」という、図書館の新たな機能と位置づけ、今後も柔軟かつ堅実に対応する予定である。

E-bookサービスのアイデアが発案された当時、「ソーシャルアントレプレナー(社会起業家)」¹²⁾の精神を持つキーパーソンが図書館の経営者層、担当者層、事業会、研究者に存在したことで、イノベーションが起こった。彼らが協働し、大枠を決め、規程を定め、運用やシステムの細部を作り込んでいったことで、事業化が実現した。そして、関係者が代替わりした後も、E-bookサービスは成長し続けて、多くの関係者(著者、読者)に支持されるサービスとなっている。関係の皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

大学図書館の未来は、社会の要請と大学が定義する自らのミッションに基づき、冷静な経営判断・組織体制整備を進めつつ、常に変化する社会情勢に果敢、かつ柔軟にチャレンジすることによって形作られる。そしてそれを作るのは、「一足先に世の中の問題と矛盾に気づき、何かを変えたいと思って、内側から輝く光を発する¹³⁾」ことができる人たちである。その一つの事例として、「お茶の水女子大学E-

bookサービス」の取組みが参考になれば、幸いである。

注記・引用文献

- 1) お茶の水女子大学 E-book サービス, <http://www.lib.ocha.ac.jp/e-book/>, (参照 2014-05-02).
- 2) お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション“TeaPot”; <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>, (参照 2014-05-02).
- 3) (社) 大学出版部協会. “私たちの目的”. <http://www.ajup-net.com/watashitachinomokutek>, (参照 2014-05-02).
- 4) E-book サービス インタビュー 古今和歌六帖輪読会代表 平野由紀子先生. http://www.lib.ocha.ac.jp/e-book/Interview_0002a.html, (参照 2014-05-02)
- 5) 佐々木俊尚. 電子書籍の衝撃：本はいかに崩壊し、いかに復活するか？. デイスクヴァー・トゥエンティワン, 2010
- 6) 日本図書コード管理センター, <http://www.isbn-center.jp/> (参照 2014-05-02)
- 7) 「第15回図書館総合展／学術情報オープンサミット2013」のポスターセッションに参加. http://www.lib.ocha.ac.jp/topics/2013/toshokan_sougouten_2013.html, (参照 2014-05-09).
- 8) 「お茶の水女子大学 E-book サービス」が平成25年度国立大学図書館協会賞を受賞しました. <http://www.lib.ocha.ac.jp/topics/2013/20130620award.html/>, (参照 2014-05-02).
- 9) 大学図書館における先進的な取り組みの実践例(平成25年11月), http://www.mext.go.jp/a_menu/kaihatu/jouhou/1341375.htm, (参照 2014-05-02).
- 10) 中央教育審議会. 第2期教育振興基本計画について(答申)(平成25年4月)において、「学生の主体的な学びの確立に向けた大学教育の質的転換」が基本施策の一つとして挙げられ、具体的な取組みとして「学生の主体的な学修のベースとなる図書館の機能強化」の必要性が指摘されている. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo9/sonota/1334511.htm, (参照 2014-05-02).
- 11) 科学技術・学術審議会 学術分科会 学術情報委員会「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について(審議まとめ)」(平成25年8月) http://www.mext.go.jp/a_menu/kaihatu/jouhou/1341375.htm, (参照 2014-05-02).
- 12) “ソーシャルアントレプレナー”とは、「起業家精神をもって社会的な問題を解決に取り組む人。社会起業家」のことである。現代用語の基礎知識. 外来語年鑑2014年. JapanKnowledge. <http://japanknowledge.com>, (参照 2014-05-02).
- 13) 渡邊奈々. 社会起業家が世の中を変える. 日経BP社, 2005, p.8

< 2014.5.12 受理 えとり なおこ お茶の水女子大 学図書・情報チーム専門職員, もり いづみ お茶の水女子大学図書・情報チームリーダー >

Naoko ETORI, Izumi MORI

Implementation of Ochanomizu University E-book Service: Towards an innovative future

Abstract : Ochanomizu University started a new publishing venture in March 2012 called the “Ochanomizu University E-Book Service”. In the past 2 years, this service has published 4 works and has 2 more in the pipeline. This paper introduces the path that the service has taken since its inception, its operating structure, budget, and publishing process as well as concrete examples of the voices of authors and readers and the usage statistics of the books published. We also consider the assessment of services, the significance of academic libraries becoming involved in publishing, and the kinds of skills and changes in awareness that are necessary to be successful based on our experiences as project supervisors. Finally we will offer suggestions on how academic libraries now and in the future can change their operational organization and services.

Keywords : university libraries / e-books / publishing / institutional repositories / publication of educational materials and research achievements